

とか……新山を、洞爺湖のロープウェイで有珠岳まで登り、山の頂上、あるいはその囲りの荒々しい山肌から白煙が吐きつづけているのを見物。有珠岳から洞爺湖を展望するのも又格別に美しかった。おもわず Oh, beautiful! と口に出る。(学のある人は違
うネ!)

さて次は、ホテルコタンで待ちに待った昼食。カレーライス。おいしいと感じたのは、空腹の為か……? 少し休み、後、湖上遊覧、大体、湖の中央にある中島まで往復80分。この中島には、森林博物館があり興味深い所だった。博物館の前の芝生の緑のあさやかなこと、白い建物と非常に調和して囲りの木々をいつそう美しくしているようだった。

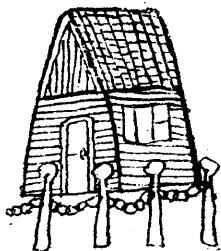
夜は自由解散があり、皆んなお土産を買いに町まで出かける。お土産を買う有様は、女性ばかりのせいか恥かしさなど眼中になく(?)4・5人ぐらいつつ、かたまつて値切ること、値切ること……大人顔まけ……ふだんおとなしそうな人でもいざとなればはりきつてしま
い……

長い北海道旅行の中でも、この事は忘れがたい事の一つです。余り頑張りがすぎたせいか、空腹になり、皆意見一致で(やはり女性だなあと痛感)ラーメン屋に飛び込み、いや飛びこんだのではなく、京女性らしく、おとなしく、おしとやかに、のれんをくぐり……空腹を満たす。(但し、この時のラーメンのまずかったことこの上なし。念のため値段80円)

長い旅行もこの日を最後に、明日から、お船とお汽車に乗って、なつかしい我が故郷に帰るのだが。考えてみれば長いようで短い旅行だった、と思う。楽しい旅もより親しくな
った友とも離れ離れになり、又、交通公社のお兄様、写真屋さん、岡部先生、そして他の諸先生方とお別れしなければ、と思うと……やはり、北海道最後の夜ともなれば、いくら
ジャジャ馬でもちよつぱり感傷的にナルモノデス。

洞爺湖 → 京都

(北海道よさようなら……)



11班 短食2の4

(西郡、長谷川、苗村、仲井
寺見、立花、脇本、和田、中野)

7月26日(第12日目)

目がさめて今日は7月26日。「あーあ。」思わず溜息が出る。北海道とも今日限りか

と思うとなんだか帰りたくなくなってきた。今まであんなにホームシック気味だったのに。朝食、魚、揚げ物、わさび漬、牛乳をたらふく食ってさあ出発。3台に分乗する予定のバスは2台に減らされた為、皆んな我先に乗り込んだ。ところが行きに比べ帰りは重量オーバー。それもそのはず、家族、友人、さては彼氏へのプレゼントか皆んな倍になつた荷物をかかえて席のとり合い。旅館の人達の色とりどりのテーブルに別れを告げて駅へ急ぐ。洞爺湖よ。サケの尻尾よ、さようなら。汽車がホームに入つて来ると一斉に中に雪崩込む。もちろん席を確保する為に……（蔭の声。こんな恰好、彼に見せたら百年の恋も醒めるカモネ。）

風景はやはり羊蹄山、駒ヶ岳、大沼、小沼等。乗務員さんの説明も良く行きとどいていて旅の最後のガイドとして印象深い。今年は冷害のせいで稲の苗は生育不足らしい。函館から連絡船に乗り換え少々ガツカリした。松前丸に比べて一まわり小さくて美しくないこの十和田丸。でも文句も言わずおとなしく横になつて一ねむりした。連絡船を降りる際、汽車の席がないので急ぐよう言われて、一時間も前から立ち並んで待つ連中が沢山でたが、我々は後迄、ゆつくり腰を下ろしていた。夜行にも、どうにか座る事が出来たし、後方の席に自衛隊の若者が数十人座っているので、少々気を良くしていたところ、その境界線には、岡部先生、写真屋さん、交通公社のお兄ちゃんが網をはつているので残念ながら……。途中で誰かが汽車から財布を落としたと一驚きしたが幸いにも、どうやら手元に帰つて来るよう手配され、本人は勿論、一同安心したのは言うまでもない。

全力を寝ることに集中して各自特有のスタイルで寝ている。行く時には、とても見られなかつた光景だ。おや、誰かが微笑んでいる。きつと北海道で何か良いことがあつたナ。あら、彼女、口をむしやむしや動かして……。まあ、器用な人。食物科は夢にまでも食べること考えるのね。私の隣の人は、棚からボタモチならぬ重いスーツケースの到来に顔をしかめている。

いろいろな思いを汽車はいつばいにつめ込んで東京へと向かう。

7月27日（第13日目）

27日早朝、寒さで眼がさめる。北海道に居る時より寒い感じ。仙台を過ぎる頃から夜明けが始まる。又しても食欲制止に悩まされ、「平」までの時間の長い事。平でサンドイッチと冷たい牛乳の朝食。声なし。

お腹がいつばいになると皆んな現金なもの。再びガタゴトという音に合わせてかわいい寝息ばかり。気が付くといつの間にか、ビルの谷間の雑踏の中に自分達を見い出していた。

いよいよ待ちに待った「ひかり号」。昨日のボロ汽車に比らべて乗り心地の良さにうかれ、昼食のサンドイッチにジュースをお腹におさめた頃、この二週間の旅の疲れが一度に出たのか、どちらをむいてもコツクリ、コツクリ。目がさめたら、なつかしい京都タワーが笑って私達を迎えていた。

北海道の思い出は「ひかり号」の如く早かった。

